

コメント：バリアフリーの観点から

教育学研究科

バリアフリー教育開発研究センター長

小国 喜弘

貧困の深刻化による「発達障害児」の急増

特別支援教育の現状 ～特別支援学級の現状(各年度5月1日現在)～



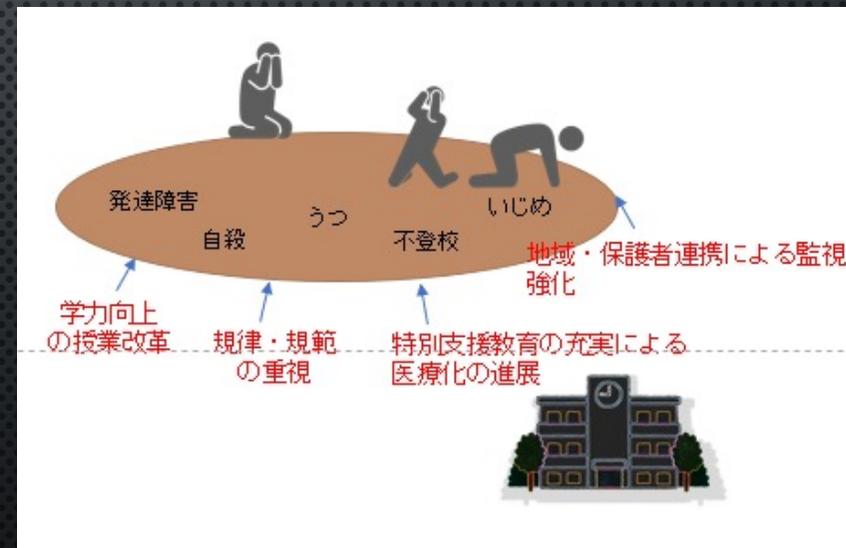
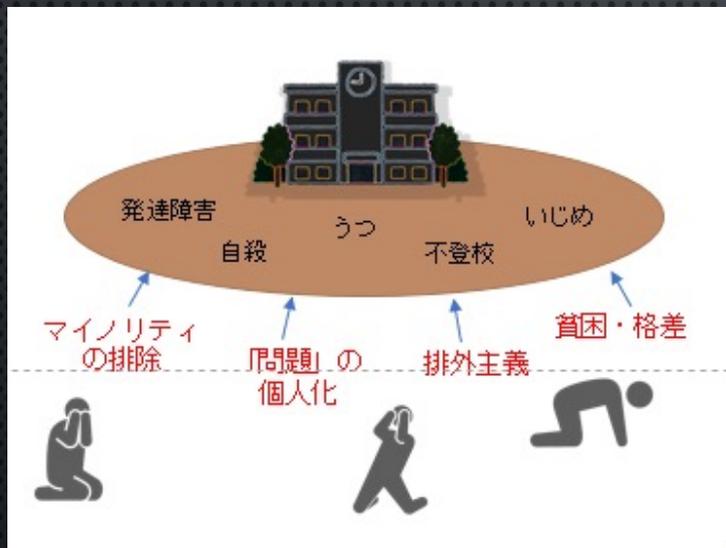
<30年度の状況>

	知的障害	肢体不自由	病弱・身体虚弱	弱視	難聴	言語障害	自閉症・情緒障害	計
学級数	28,106	3,117	2,279	508	1,226	704	27,429	63,369
在籍者数	121,160	4,718	3,725	592	1,825	1,815	122,836	256,671

	小学校	中学校	義務教育諸学校	計
学級設置学校数	16,392	7,928	73	24,393
全学校数	19,892	10,270	82	30,244

	小学校	中学校	義務教育諸学校	計
学級担当教員数	47,197	20,760	309	68,266
特別支援学校教諭免許状所有者	15,266	5,695	87	21,048

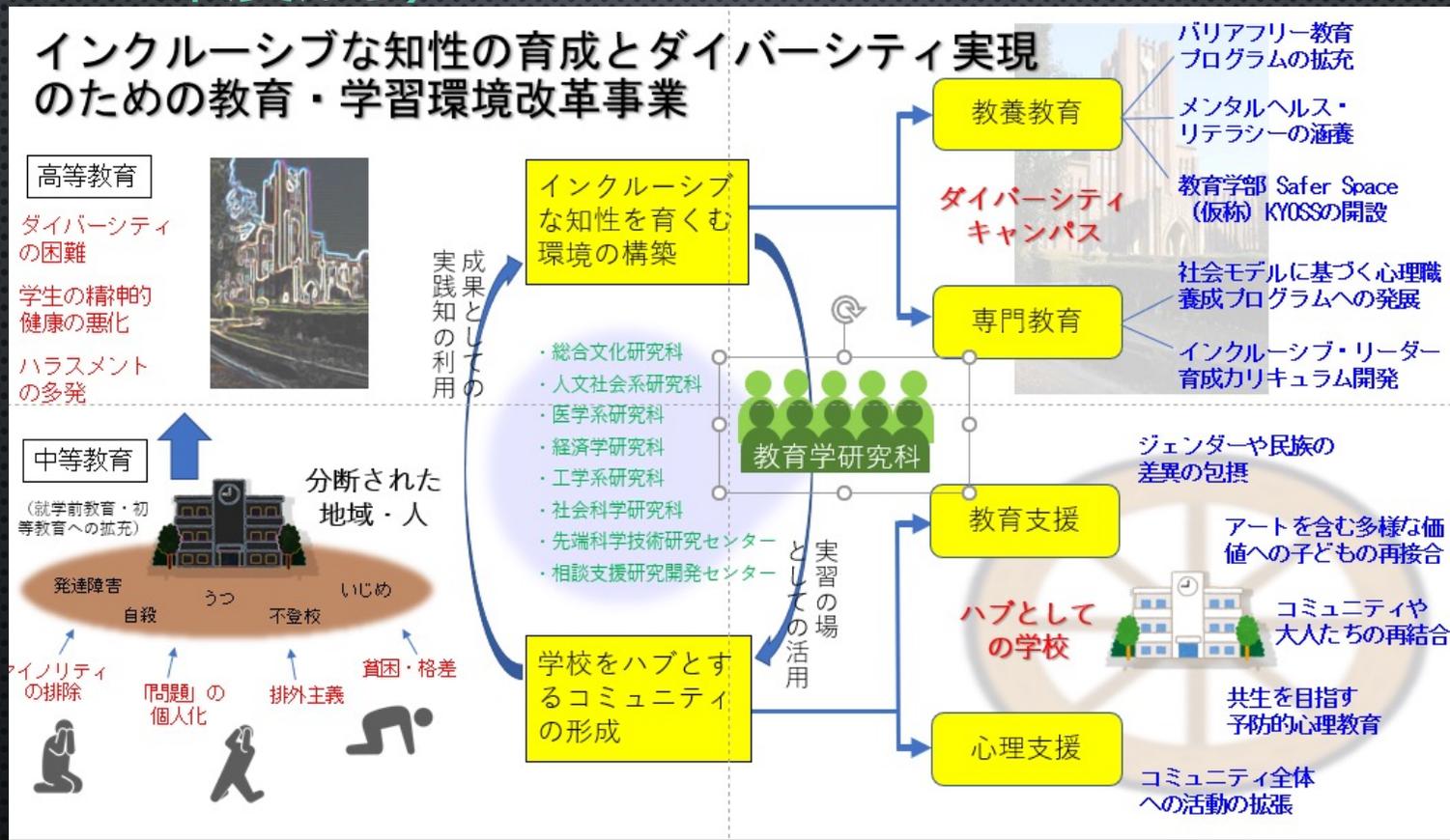
社会の問題が子どもの危機を深刻化させている側面と同時に
学校教育が子どもの危機を深刻化させている側面がある。



発表から学んだこと

- ①貧困の問題を、つながりの喪失・学習環境の喪失・育まれる環境の喪失と捉え、居場所支援・食事支援・保護者支援を含む環境の再構築によって貧困を克服しようとする、いわば障害の社会モデル的アプローチが採用されている。
- ②子どもたちの「安心」「安全」の場をどうやってつくるのかに焦点があてられている。そのための「連携」をどうつくるのか。「安心」「安全」な場を通して、周囲の大人がその子への見方を変えていく過程を丁寧につくっていくということも含まれている。
- ③支援がスタッフにとっての学びを構成している。「貧困とはなにか」「この子にとっての安心とは何か」など様々な問いが醸成される。行動の背後を丁寧に看取ろうとするスタッフの学びがあるからこそ、スタッフと子どもとのつながりが可能になっているのではないか。共に学ぶ関係の成立。

「ハブとしての学校」への転換を先導するプロジェクトを計画 (2022年度から)



ありがとう

ございました

